

2月25日（水） Queensland Health Skills Development Centre

報告：大槻好史

2月25日（水）早朝にオーストラリア・ブリスベンに到着。午後より Queensland Health Skills Development Centre（SDC）を見学した。

近年、医療の現場における安全管理に対する意識は高まりつつあり、各医療施設でもさまざまな対策を講じている。しかし、ますます高度化し、効率化が進む現代医療の中で、ヒヤリハット事例や医療事故は後を絶たない。これらの一因には、医療従事者のスキル不足がある。たとえば内視鏡手術の操作や ICU 内での管理の中で生じるミスなどは、医療従事者がある程度のトレーニングを積み、状況に慣れていれば避けることができたかもしれない。現在こうしたトレーニングを積む機会は、大学や医療関連の専門学校の中の教育課程などごくわずか。そのため臨床の場



がいきなりトレーニングの場になっている場合も少なくない。SDC は医療従事者のトレーニング施設で、真剣勝負のトレーニングを真剣に行うリアルな場を提供している。SDC は世界でも有数の規模を誇る技術開発センターで、3500 平方メートルの敷地内に 26 ものトレーニングルームを備えている。この施設の Associate Professor である Marcus Watson 先生が案内してくれた。

【Skills Development Centre】

まず Surgical and Psycho-Motor Skills domain の中の Laparoscopic Surgery course を見学。下の写真のようなキットが何体も設置されていた。

モニターを見ながらプラスチックのブロックを移動させたり、糸結びの練習ができる。



【実演してみせる Watson 先生】



【シミュレータ】

次に CPR and Airways laboratories を見学。ACLS 講習会でおなじみの人形がズラリと並んでいた。ここでは、マスク換気や気管挿管のシミュレーションをする。



【シミュレータ】

次に Scenario-Based Training domain を見学。レコーディングスタジオのような作りになっている。シナリオに基づいたシミュレーションをガラス越しにチェックできるようになっている。内部にはモニターが幾つも設置されており色々な角度から手技をチェックできる。一部始終は録画され、フィードバックする際に利用される。様々なケースを想定したシナリオ（Airway emergencies や Anaesthetic emergencies など）が用意されている。



【トレーニングルーム】

次に Communication and Human Factors domain を見学。患者さんとの対話の一部始終を同様にガラス越しにチェックされる。

シミュレーションを通して、何を感じたか？なぜ上手くいったのか？なぜ難しかったのか？何が違うのか？何を学んだか？を常に自問しながら学んでいく。



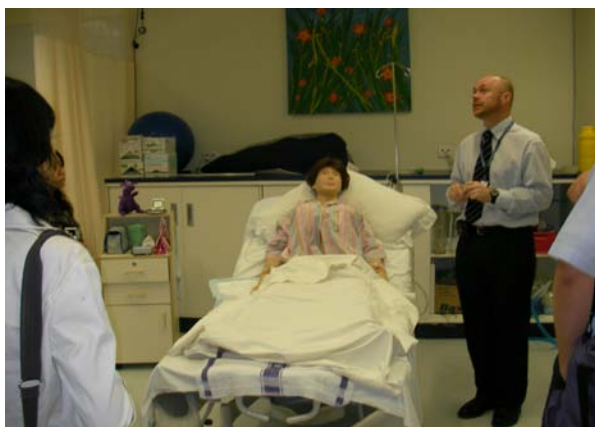
【ガラス越しに見える様子】

最後に見学したのは、分娩室のシミュレーション。生まれてきた赤ちゃんの人形の頭部には大泉門・小泉門まであった。

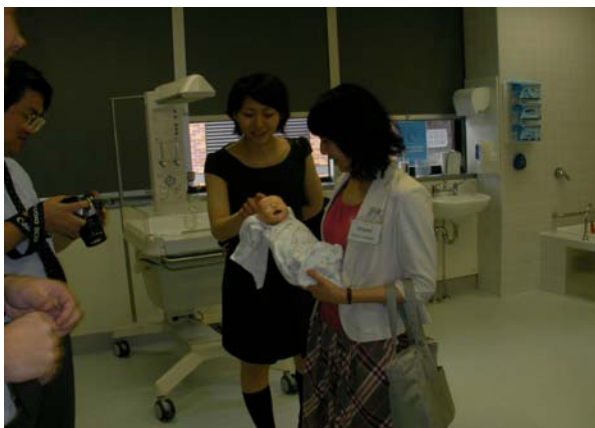
Associate Professor である Marcus Watson 先生が強調して言っていたことは、「医療のシミュレーションは flight のシミュレーションに比べるとまだまだ遅れている」ということだった。1999年発刊のアメリカの雑誌で医療過誤による死亡者数は交通事故死よりも乳ガンによる死亡率よりも多いという衝撃的な調査結果を公表し、医療でも航空産業で行われているようなシミュレーションを取り入れるべきとして当時のクリントン政権は全米100箇所にシミュレーションセンターを設置したという。

真剣勝負のトレーニングを真剣に行うにはリアルな場、プロが本物と思いきむ環境（救急治療室、心臓カテーテル室、分娩室、一般病棟、ICUなど）が必要になる。状況が刻々と変化するハイテクペイシェントシミュレータ、シナリオを走らせる台本と監督、音声・画像・行動の記録をもとに振り返る作業などが必要になってくる。

アメリカや今回訪れたオーストラリアに比べると、日本の医療シミュレーションは、場所の確保の問題やインストラクターの数の問題を原因として遅れているようだが、ヒヤリハット事例や医療事故は後を絶たない現代医療の中で必要不可欠のものとなりそうだ。



【妊婦のシミュレータ】



【新生児のシミュレータ】